

各 位

2022年4月25日

株式会社 山と溪谷社

<https://www.yamakei.co.jp/>

身近な動物のことを全力で考え続ける。  
野生動物を好きすぎる著者の奮闘動物エッセイ  
『動物行動学者、モモンガに怒られる』発刊！！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、4月25日に『動物行動学者、モモンガに怒られる』（小林朋道）を発刊しました。



目をあけて眠るアカネズミ、公衆トイレをつくるタヌキ、孤島に1頭で生きるシカ、ハエに血を吸われるコウモリ。

野生動物を好きすぎる著者の奮闘動物エッセイ！

動物行動学者である著者は、稀代の野生動物好きと言っても過言ではありません。学生時代から自宅でアカネズミの生態を観察し始め、羽根の折れたドバトや負傷したタヌキを見過ごせず保護し、アカハライモリの生息環境を守るために深夜の草刈りで職務質問を受け、そしてニホンモモンガの調査中に母モモンガに睨まれる――。

9種の野生動物を取り上げながら、彼らのユニークな生態、彼らと濃く触れ合う日常、共存のあり方までを語り尽くした一冊です。

人気イラストレーター・帆さんのイラストとあわせて、フィールドワーク中の貴重な写真もたっぷり掲載！

「どんな動物でも（植物でも）そうだが、彼らの習性を知れば知るほど、懸命に生きているんだなー、という思いが湧いてくる。それもまた、懸命に生きるヒトという動物の習性なのだ。」（本文より）

# アカネズミは目をあけて眠る

「懸命に生きているんだな」という思いが大切だ

野生のアカネズミとの出会い 20

せつせとドングリを埋める夜 23

持ちつ、持たれつ生きている？ 26

「テキパキ」という名のネズミ 29

それぞれのドングリのゆくえ 32

アカネズミとドングリの謎 36

動物は目をあけて眠れるか？ 39

ヒトという動物の習性 44

アカネズミ図鑑 46

# 動物行動学者、モモンガに怒られる

経済的利益と精神的利益が必要なのだ

産む子どもの数が問題だ 50

哺乳類の子育て戦略をまよませませ 53

生存戦略を左右するシンプルな原理 56

二ホンモモンガは子どもをたくさん産むか？ 59

母モモンガに睨みつけられる 64

モモンガの森と生きる 69

経済的利益と精神的利益 74

二ホンモモンガ図鑑 78



## 野生のアカネズミとの出会い

読者の皆さんは、アカネズミというネズミをご存知だろうか。低地では、河川敷や海岸近くの疎林にも、鳥取では鳥取砂丘のすぐそばのハリエンジュの林にも、高地では、海拔一〇〇〇メートル近くの林まで、(鳥取では、県内で二番目に高い山、名前から高そうな氷ノ山<sup>氷ノ山</sup>の頂上近くにも)生息する。適応力抜群の野生のネズミだ。

私がアカネズミと出会ったのは、大学の一年生のときだった。早く動物の行動を対象にした研究のようなことがやってみたくて、大学の図書館などで、動物の生活を研究した書籍や論文を探した。そして、興味深いものが見つかると思い入るように読んで記憶がある。

いっぽうで、学生アルバイトで、シマリスを飼い、私なりに彼らの生活を観察した。野生のリスやネズミなどの小型哺乳類の捕獲には、ホームセンターで売っている、家庭のネズミを捕獲するためのトラップも使われることを知った私は、それを購入し、大学の近くにあった、農学部の実習林に行き、それを仕掛けた(当時の私は、法律に依って、野生鳥獣の捕獲には都道府県知事からの許可が必要であることなど、全く知ら

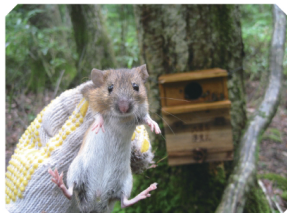
なかった。

日中に林に行き、ヒマワリの種子をおとりにして、数個のトラップを仕掛け、翌朝、ワクワクしながら様子を見に行くのだ。初めて、トラップの中に茶色い小さなネズミが入っているのを見たときは心が踊った。そりゃあそりゃあ。ホモサピエンスとは、(狩に嫌は)そういう動物なのだ。

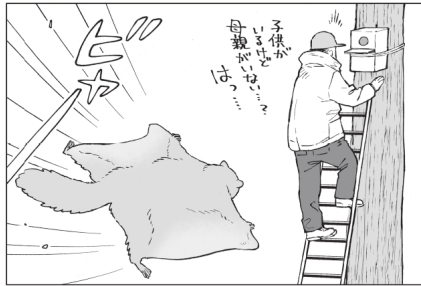
それがアカネズミとの最初の出会いだ。アカネズミにとっては迷惑な話だ。

ただし、その小さな野生のネズミが「アカネズミ」と呼ばれるネズミであることはそのときは知らなかった。後で、事典を調べて知ることになったのだ。

実験用のマウスは大学で何匹も見たり触ったりしていた。でも、アカネズミは、品種改良されて、仕草も穏やかで、扱いやすくなったマウスとは大いに異なっていた。トラップの中から私を睨む目



森に仕掛けたトラップに入っていたアカネズミ。なんとも可愛い雄である(後脚の間に糞丸の影が見える)



49 動物行動学者、モモンガに怒られる

標高六〇〇メートルを超える芦津の森には、まだ雪の斑点が残る。スギの木にハンゴをかけ、地上六メートルのところに取り付けた巣箱を見上げながら上っていった。モモンガの森で出会った母モモンガと子モモンガの話。

に出合ったりするのだ。  
「あつと驚くような場面」とはどんな場面か？……と聞いてはけない。予想もできないような場面だから、理論的にここで書くことはできないのだ。そして、このあつと驚くような意外性が、自然の魅力の一つでもある。  
まだ多くの植物が葉を落としたままの森の中を、惜しみなく降り注ぐ透明な光を感じつつ、まだ寒さを感じる澄み切った空気を吸い込みながら歩くのだ。  
木々の間を歩いていると、ときどき、表面が光を浴びてキラキラ光る水場に出合うことがある。それは、雪が溶けた水が地面の窪地に溜まった水場だ。  
近づいてみよう。  
あ！っ、なんと澄み切った水なんだ！  
そして、さらに中を覗き込んで、水溜まり全体はじつと目をやると……、私の経験では、二四パーセントくらいの確率で、ものすごい密度の（うじゃうじゃ）とも言える小



早春の山を歩くとき木立ちの中に雪解けの水がつくった水溜まりが光を反射して輝く。そんなとき私は胸がワクワクする。そこにはしばしば生命の営みがあるからだ

163 脱皮しながら自分の皮を食べるヒキガエル

そのあたり、あるいはそのあたりを超える標高の森では、雪が溶けて水が溜まった場所にアカハライモリがいたり、本草の主役であるヒキガエルが産卵していたり、運がよければ残雪の上にあるニホンモモンガの食痕に出合ったりできる。それ以外にも、植物も含めて、あつと驚くような場面



私はカエルの中でヒキガエルが一番好きだ。子ガエルのころからドッシリして腹をくくったような顔と動き方、愛もいよね

### 早春の雪解け水に棲むものとは？

本章で登場するのは、ヒキガエルである。

私は早春の、晴天の山を歩くのが好きだ。中国地方では、標高五〇〇メートル近辺の森の中は特にいい。標高五〇〇メートル付近をそこひいきするわけではないので、「標高数百メートルの森の中も特によい」と言ったほうがよいかもしれない。

162

## ●著者略歴

小林朋道（こばやし・ともみち）

1958年、岡山県生まれ。公立鳥取環境大学副学長。岡山大学理学部生物学科卒業後、京都大学で理学博士取得。岡山県で高等学校に勤務後、2001年に鳥取環境大学環境情報学部環境政策学科（現：公立鳥取環境大学環境学部）助教授、2005年に教授に就任。環境学部長を経て2022年より現職。専門は、動物行動学、進化心理学。著書に『先生、巨大コウモリが廊下を飛んでいます！〔鳥取環境大学〕の森の人間動物行動学』をはじめとする先生シリーズ（築地書館）など多数。研究、およびプライベートでさまざまな動物と交流を深め、数々の知られざる生態を発見してきた。ヒトと自然の精神的なつながりや、動物行動学を活かした野生生物の生息地の保全にも取り組んでいる。

## ●書誌データ

書名：身近な野生動物たちとの共存を全力で考えた！ 動物行動学者、モモンガに怒られる

著者：小林朋道

発売日：2022年4月25日

定価：1,925円（本体1,750円＋税10%）

304ページ／46判・並製

<https://www.yamakei.co.jp/products/2821063140.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心に、国内外で山岳・自然科学・アウトドア等の分野で出版活動を展開。さらに、自然、環境、ライフスタイル、健康の分野で多くの出版物を展開しています。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

---

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当：綿

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: [info@yamakei.co.jp](mailto:info@yamakei.co.jp)

<https://www.yamakei.co.jp/>